

出会いは世界を広げていく

交流会を通して

新連載 第2回

土肥いつき DOHI ITSUKI

京都の公立高校教員。24時間一人バレード状態のトランス女性。趣味の交流会運営で右往左往する日々を送っている。

交流会の源流

前号にも書きましたが、この連載のテーマは「交流会」です。なかでも、わたしが世話人をしているのは被差別マイノリティ生徒が集まる交流会です。実は被差別マイノリティ生徒は学校の中にたくさんいます。

しかし、だからといって「出会える」わけではありません。このような中、わたしには交流会をおこなう以前に被差別マイノリティ生徒たちとの出会いがありました。ただ、出会いがあったからといって、それがそのまま交流会という活動につながるわけではありません。なぜなら被差別マイノリティ生徒をエンパワメントする方法はたくさんあるからです。その中で、試行錯誤の末、わたしは「交流会」という方法にたどりつきました。また、わたしが世話人をしている交流会には共通していることがあります。それはプログラムです。「みんなでごはんをつくる」「みんなでごはんを食べる」「自己紹介をする」がそれです。かつて他県で外国人生徒の交流会を運営している人から「目的を持って集まらなければならない」と言われたことがありますが、わたしは「集まることそのものが目的」であっていいと思っています。なぜ被差別マイノリティ生徒と出会えたのか。なぜ「交流会」という方法をとるに至り、なぜ現在のプログラムを選択しているのか。

これらを説明するためには、わたしの教員としての経験だけでなく、わたしの生い立ちまで振り返る必要があるかと思っています。そこで、今号からしばらくはこうした話を書こうと思います。ただし、わたしはすでに『「ありのままのわたしを生きる」ために』という形でライフストーリーを書いています。ところどころ重複する内容になることをお許しください。

今振り返って見ると、「人が集まる場」との出会いは、小学生の頃までさかのぼるような気がします。わたしの両親は、わたしをYMCAに通わせていました。YMCAには少年体育のような「何をするのかははっきりしている活動」もありましたが、わたしが所属していたのは「グループ活動」と言われるものでした。グループは同学年の数人の子どもたちと大学生のリーダー

で構成されていました。活動には年間通じた目標などなく、ただ毎週土曜日にYMCAの会館に集まり、同じグループのメンバーと遊んでいました。リーダーも特に何をするわけでもなく、みんなと一緒に遊んでくれました。グループ活動の最後は、みんなで話しあって次の週の遊びの内容を決めます。ただそれだけの活動でした。それでも毎週みんなで集まって、竹馬づくりをしたり、たこ焼きをつくったり、会館全体を使って鬼ごっこをしたりして遊んでいました。ある時は「テント建ての練習」と称して、本来建ててはいけないところにテントを建てたことがありました。当時のテントは、張り方もたたみ方も技術が必要でした。「巡回の人が過ぎ去ってからテントを張り始めて、次にまわってくるまでに、テントの撤収まですませよう」というリーダーの提案はとてもスリリングで、ワクワクしながら「練習」したことを今でも覚えています。

YMCAでもうひとつ出会ったものは夏のキャンプでした。キャンプには、キャンプファイヤーをはじめ、さまざまなプログラムが用意されていました。しかし、いま振り返るとそうしたプログラムよりも、2泊3日という長い時間を、はじめて出会った他のメンバーとともに過ごした生活を思い出します。もちろんみんなが常に仲よしなわけではありません。時にはケンカも起こります。それでもキャンプが終わる頃には別れたくない仲間になっていました。キャンプでの経験は、まるで1年間の「グループ活動」を2泊3日に凝縮したかのようなものでした。そんなグループをコーディネートしてくれていたのは、やはりリーダーでした。

そんな経験を積むうちに、わたしは「将来リーダーになりたい」と思うようになりました。そしてのちにキャンプリーダーをした経験が、わたしの教員としてのあり方や交流会のつくりかたに大きな影響を与えることとなりました。ただ、リーダー経験について書く前に、もう少し書かなければならないことがあります。次号では、はじめてコミュニティをつくる側になった大学時代のことを書こうと思います。